

てらす

Vol.085

てらす

Vol.085 館長コラム
「秋野先生とインド」 滝沢具幸

今秋開催されるミュージアム・サミット 美の競演 ―三遠南信交流展― では、豊橋市美術博物館・浜松市美術館・浜松市秋野不矩美術館と当館のそれぞれで所蔵している代表的な作品が出品される。各館の個性と魅力を紹介する展示はおおいに楽しみである。

特に私にとって、浜松市秋野不矩美術館から出品される秋野先生の作品 9 点をまとめて拝見できるのは嬉しい限りである。

先生とは創画会という同じ日本画の会派でその一員として創作を続けてきただけに、ひとしお喜びが深い。創画展の審査の折や個展の折などで、先生からうかがった話、そのお人柄、たずまいは今も心に残っている。

何時も明るい色の着物姿の先生は 80 歳の時も 90 歳近い頃になっても変わらず、初々しく絵を描く楽しさを語って下さった。

以前出版された「日本画を語る」（なにわ塾叢書）の前書きで先生は「私は絵を描くことが大好きなの…。でもねえ、おしゃべりすることは全く苦手なのよ…。」と話されているが、その中では日本画のこと、創造美術（創画会の前身）結成の頃のこと、インドの魅力など

について情熱的に語られている。

先生は 1962 年インドの大学（タゴールの理想により建てられた）に客員教授として 1 年滞在し、以来インドをテーマにした作品を数多く描かれた。その作品群の明快な色彩と暖かい造形は、見る人の心を深く捉えることと思う。

今回出品される「廃墟Ⅱ」は幅 275cm の大作で、群緑色の真青な空の下に黄土色に輝く古びた土の門が描かれている。先生はこの作品に「カッチ地方は 4 年も雨が降らないという。気の遠くなるような果てしない広野、声なき大地、ただ渡る風。」という言葉添えている。また「帰牛」は 1995 年 87 歳の時の作品で、黒い牛の群が角を並べて河を渡ってゆく様子がゆったりとしたリズムの中に描かれている。インドの悠久な雰囲気を感じる作品である。

先生は「滝沢さん、一度インドへ行ったらいい。きっとあなたなら気に入りますよ。田舎道を荷車に乗せてもらって、のんびりと行くのです。9 月頃になるとガーシュというすすきの穂が輝いていて、それは綺麗なのよ。」と話して下さいました。

秋野先生は 2001 年、93 歳で亡くなりました。

私は未だインドへの旅を果たせないままである。

インフォメーション

□ 特別展 ミュージアム・サミット 美の競演 ―三遠南信交流展―
2010.9.11 → 10.11

□ 特別展 獅子舞 ―ユーラシアから伊那谷へ―
2010.10.16 → 11.23

□ 平常展示 山村風景を巡る―伊那谷の洋画家
2010.10.22 → 11.23

□ パネル展示 ジオ・パーク展
2010.12.4 → 2011.1.23

飯田市出身の美術家、前沢知子さんによるワークショップ「からだをいっぱい使ってお絵かきしよう！」は、2007年からスタートし、それ以来、毎年開催してきました。このワークショップでは、親子による自由な描画遊びに重点を置き、そこで生み出された素材をもとに、前沢さんによる制作作業が加わり、私たちの作品を見てください」というタイトルの作品として展示をしています。2010年には、組替え絵画という概念も登場し、作品としての広がりも見せ始めています。第4回の展示を終えた前沢さんに、このワークショップについてお聞きしました。

「からだをいっぱい使ってお絵かきしよう！」のワークショップも4度のお話を伺いして、私が制作する作品で、参加型の方法をとるものがありましたので、そのプランが適切なように考えました。それはなぜかというと、「飯田」からフランスでの滞在制作が思い出されたからです。私は2000年にタイムラークライスラー・グループによる企業メセナ活動である「アート・スコープ」を受賞し、フランスに滞在し、作品を制作し展示会をする機会を頂きました。滞在地は、フランスのモンフランカンという、ひまわり畑に囲まれた美しくとても小さな中世の城塞都市でしたが、その環境やスケール感、地域性は、私には飯田が思い出されました。特に「地域住民との関わり」はとても印象的で、結果としてその時制作した作品は「地域住民との関わり」を素材にし、「地域住民の参加」を取り入れたものになりました。そして、この時から私は「参加」という要素を大きく取り入れた「参加型作品」を制作するようになりました。そのモンフランカン同様、飯田地域そして美術博物館にとっては、「地域との関わり」がとても重要な要素と考えました。

最初の募集の時、飯田では珍しいイベントとして捉えられたのか、予想以上に期待が大きく、応募者が参加定員を遙かに超えてしまいました。参加できた方は、大変な競争倍率から残った幸運な方々でした。どんなワークショップになるのか期待感がありましたね。第1回目は、大きく広げた白い紙の上で、いつも使う筆ではなく、手や足、それからローラーなどを使って自由に絵の具遊びをしてみようという感じになりましたが、参加された方の様子などについて、前沢さんが事前に予測されていたことの違いなどはありましたか。

実際に現れた絵の具の表情は、予想以上にダイナミックなもので、子どもすなわち人間のエネルギーなど「生命の力」が爆発した痕跡でした。かつその一方で、色彩的、絵画的にはとても美しく、描画としての様々な要素が混在するものでした。テーマは「体で描く」ですが、そもそも「描く」こと自体、身体で行う活動なのだと見せつけられたように思います。また、よく動き回る子どもは絵の具の軌跡が線となり、じつとしている子どもは絵の具の軌跡が面となって現れます。子どもの「個性の違い」が、絵の具の「表現の違い」になります。「個性の違う様々な子どもがいるからこそ、絵画の表情が豊かなになる」、これはまさに美術の核心に触れるようでした。

絵の具を取り出す前に、白い紙の上を歩いて身体遊びを取り入れてもらっていますね。制作の前段階のウォーミングアップのような効果をねらっていらっしゃるのでしょうか。いきなり絵の具を使うのとは違った効果を期待されていますか。

第1回目のワークショップ後の現代の創造展では、壁面をいっぱいに使った展示となりました。これに、額による作品が加まりました。ワークショップで作られた素材を利用しての初めて

の展示でしたが、どのようなことに留意されましたか。予想外の出来事や苦勞された点などあればお聞かせ願いたいのですが。

このワークショップでは、子どもたちが「描画行為の本質」にふれられるような体験をするのが大切だと考えています。そのために、先入観や状況に影響されない感覚や無意識が出やすくするために、心身のリラクセスをはかっています。その方法として「自己と他者」を体験する運動や遊び（前沢考案のスキンストレッチ、空間体感運動）などを始めに行っています。

ワークショップ終了後の状況は、まさに子どもたちのパワーが排出されきったものでした。その残物を、作品では先入観や前提を持たないものに仕上げるよう留意しました。そのために、ワークショップとは切り離して、作品として独立したものになるよう心がけました。

第1回目の展示作業では、他の展覧会出品者の方々が見守る中でインスタレーションの制作展示作業を行ったので、実際、公開制作のようであり、パフォーマンスのようでもあり、意外性がありました。作品制作をしていると、表現が質にかわる瞬間がありますが、その瞬間を見守る方々の反応として感じたのは、貴重な体験でした。

第1回から第4回まで、基本的には絵の具を使った自由な表現を体感することが主目的となっていますね。しかしそれぞれの制作は、同じようであって、そうでもないところもあると思いますが、それぞれの回で違った思いというのはありましたか。

全体のテーマは「全身（動作）を使って、絵の具で自由に表現する」ことですが、さらにその全体テーマを深めるために、各回個別にテーマがありました。第1回目のテーマは「体で描く」、第2回目のテーマは「想像の体験」、第3回目のテーマは「絵画技法：ドロッピング（垂らし絵）の全身体験」、第4回目のテーマは「親子でまなぶ制作と鑑賞」です。

このワークショップの特徴のひとつは、親子を対象としていることにあると思います。前沢さんは、子どものお絵かきと心の関係などについて、しばしば言及されていますね。親子でちよつと風変わりなお絵かきを楽しむこのような機会を通して参加者にとってはどんな発見があるのでしょうか。

人は日常生活の中で、「客観的になる」ことはとても難しいことだと思います。自身の経験から感じることは、「親の子へのまなざし」に客観性が加わる親の心にゆとりが生まれ、「見えないうえが見えてくる」ということです。親が子どもと一緒に絵の具の感触を体験する、そして親が子どもの視線を体験することで、今まで気がつかなかった「子どもの存在」がみえてきます。「我が子のお絵かき」から「人間の描画行為の本質」がみえてきます。

これは作品制作でも同様です。「主観的意識」から「客観的意識」に切り替わると、作品がみえてきます。「客観的になる」ことがいかに難しく、また大切であるかということなのです。

展示についてはどうか。回ごとに異なる印象がありますね。第2回目は、額を使った展示でしたが、第3回目はまた壁面全体の展示になったり、またテーブルの上に作品を載せてみたりもされています。第4回目は額に戻りましたね。

展示で大切にしていることは、「描画行為の本質への問いかけ」になるように、作品を制作し、展示することです。それに関しては、1回目から4回目まですべて一貫して制作しています。

例えば、額装の展示であれば、できるかぎり作者の私意的行為を省く、つまりトリミング、カット、額装に限定し、制作行為を最小限にすることで、匿名性を絵画作品に取り込んでいます。

また、壁面全体やテーブルを使った展示では、テーブルは来館者によって移動され、背後の壁面、テーブル同士の位置関係は変動します。「移動」という要素を取り込むことで、固定された絵画の枠を超えて、作品は単なる「関係」や「変動」になります。

「組替え絵画」は作品のタイトル名ですが、この作品は言葉通り「組み替える」ことが可能という「絵画」作品です。実際に展示の度に作品ピースの組み合わせを変えることができ、その時々で組み合わせで作品の表情が変わります。「組み替える」ことが可能、ということでは、表現が固定されていない、流動的な絵画作品ということ。さらにドロッピング技法は、中心がない、上下左右がないという特徴があり、作品を組み替える際に、その特徴により、組み替える意味がさらに効果的に作品の表情として現れます。

このような「組み替える」ことが可能な「絵画」に仕上げたのは、ワークショップの残物から制作されたこの作品のテーマには、「描画とは行為か結果か」という「描画行為の本質」への問いかけが根底にあるからです。

前沢さんの第1回目の展示に合わせて、「美術がものとの隙間を埋めたり、人と人の隙間を埋める」というコメントを添えてみました。前沢さんの初期のお仕事に岩の亀裂など自然にできた隙間に糸を詰め込むというものがあって、これをもとに呈示してみたんです。美博でのワークショップと前沢さんのその他の作品も繋がっていると思いますが、そこにはどのようなテーマが根底にあるのでしょうか。

美術博物館では、今後でもできればこのワークショップを継続して行えればと考えていますが、前沢さんが、これから先、この飯田の地でのワークショップにどのような期待を寄せられますか。それと、美術博物館では夏のイベント「美博まつり」でも「お絵かき革命」というワークショップを担当していただいています。これについては、また違ったねらいがありますか。

前沢知子 プロフィール

1972年。長野県飯田市生まれ。東京造形大学卒。岩の亀裂や壁の釘穴などに糸を埋め込み「すき間」を顕在化させる作品で注目を浴びた後、2000年のタイムラークライスラー・グループによる「アート・スコープ」で、フランスへの派遣作家に選ばれ、その作品を見てください」と題して、街のあちこちに黄色い箱を置き、ギョウリへの来訪者が作品と思うものを写真に撮ってもらい、それを掲示した。飯田市美術博物館は、2007年にワークショップ「からだをいっぱい使ってお絵かきしよう」と展示「私たちの作品を見てください」を連動させたプロジェクトをスタート。「美博まつり」でもワークショップ「お絵かき革命」を展開している。